

石ノ森章太郎画伯の生涯学習観

—「生涯学習」の法定マスコット“マナビイ”を中心に—

教育学部非常勤講師 谷川 守 正

(一) 生涯学習の法的定義不在と 法定マスコットマーク

わが国の「生涯学習」は関係法令⁰¹に明確な定義を欠いたまま、一定の成果を挙げている。例えば毎秋都道府県持ち回り方式⁰²の全国生涯学習フェスティバルは、生涯学習の推進に貢献している。ユネスコ⁰³などの生涯学習の国際的定義についても今日に至るまで、試みの段階に止まり、世界の共通認識が得られていない。

余り注目されていないが、国民の生涯学習観に一定の影響を及ぼしているのは、石ノ森章太郎画伯の生涯学習の法定マスコット「“マナビイ”」⁰⁴である。法令にしたがって全国生涯学習フェスティバルの公式イベント、生涯学習事業のPR資料に使用されている。

そのマークは国民の生涯学習のイメージ形成において共通理解を助ける。その普及面である意味では、学術用語よりも効果的である。周知のように「マナビイ」は生涯学習の愛称であり、国民に親しまれる。それは一般に「まなび」と「ビイ」の合成語とされる。

しかしその公式マークに生涯学習の多くのメッセージが巧みに込められていることは、今まで感覚的、直覚的に捉えられ⁰⁵ていて、殆ど気付かれていない。それはわが国の生涯学習観の到達点と今後の検討課題を提示する。また生涯学習関連学会にも論じられない。研究に値しないと見られているのかもしれない。それは街づくりの中心に石ノ森を据える石巻市地域振興

を論じた岩佐信宏の修士論文⁰⁶に触れられているだけである。それ故に石ノ森の生涯学習観をそのマークから析出するために、確実な研究方法が求められる。

(二) 研究方法論

その「マナビイ」を客観的に読取り、そこから生涯学習観を抽出するためには、類似の研究課題の方法を適宜に適用する他はない。そしてその研究方法を科学的に批判する研究方法論は必要不可欠である。勿論岩佐論文の批判はその前提の一つである。

岩佐は石ノ森の作品の一つとして「マナビイ」を取り上げるが、生涯学習論を課題としていないために、そのマークから「学習」の文字を読み取ることに止まっている。しかしそれは「マナビイ」の生涯学習観の第一歩⁰⁷に過ぎない。

まず広い視野に立って国際的に通用する96年第5回国際成人教育ハンプルグ会議のロゴマークとそれを引き継ぎ、それに一部修正を加えた2003年同上中間総括バンコク会議のロゴマークの研究方法是「CONFINTEA, V ロゴと生涯学習原理」⁰⁸に、そして歴史的に17世紀末葉に徳川光圀寄進の「知足のつくばい」の研究方法是「京都龍安寺の生涯教育論」⁰⁹、「十牛の庭」の女性教育¹⁰、「黒谷本『一枚起請文』花押の仏教教育的意味」¹¹、および「親鸞御影の仏教教育的意味」¹²、にその有効性が立証され、また

「生涯教育学序説—往生院本選択集における師資相承—」¹³、と『「歎異抄」蓮如本における教育的回心の生涯教育的意義』¹⁴、および『「御文」の生涯教育的意味』¹⁵の科学研究方法は、奈良当麻寺奥院蔵『往生院本選択本願念仏集』¹⁶と西本願寺蔵『蓮如本歎異抄』¹⁷が国の重要文化財に指定される契機となった。

ユネスコのロゴマークの形と色から右掌の筋のデザインを解析し、そこから生涯学習の視野から新しい国際的学習論を分析した。それは成人学習ハンブルグ宣言の理解を助け、生涯人権学習を導きだした。すなわち国際的学習を端的に表現するその手筋のロゴマークは、成人学習ハンブルグ宣言の重要な第1・2条に通じることは、「成人学習ハンブルグ宣言の隠れた人権教育—生涯教育人間学の視点から—」¹⁸に明らかにする通りである。

(三) 平成日本の生涯学習観の

マスコット“マナビイ”の問い

1. 蜜を集め（帰巢中の）子供の働蜂はなぜ2頭身に見るように子供か。
2. 頭上に目立つ赤丸¹⁹の付いた触角3本は何のためか。
3. 満杯の蜜壺を片手に持つ（擬人法的表現）が、なぜ重い壺を持つか。
4. 背中中の2枚の羽の白色（カラー版も）はなにを表すか。
5. 小さな鼻と口に対して大きい目（耳はない）をするが、なぜ耳を画かないのか。
6. 章太郎の創作のサイン「SHO」がなぜ公式のマークに付くか。
7. “マナビイ”からなぜ引用符を除き、平かな表記の「まナビピア」とするか。
8. 楷書、筆記体のスローガン「新しい風、生涯学習。」をなぜ省略するか。

以上の問いがマスコットに作者が投げ込んだ

生涯学習のメッセージの一端を明らかにする。問い掛けは研究方法論に裏付けられた研究方法に基づく。それによってメッセージが読み取られ、作者の生涯学習観を浮き彫りにする。



デザイン: 石ノ森 章太郎

生涯学習のマスコット“マナビイ”

石ノ森 (1938~98) 作のマスコット“マナビイ”(図1)

第8回 全国生涯学習フェスティバル



96年第8回全国生涯学習フェスティバル福岡」の案内表紙「まナビピア」(図2)

(四) マスコットマークの メッセージの読み方

① まず目を惹く赤丸つきの3本の触角の形に自然に目が向くと、本来2本である昆虫の触角は、外部からの情報の受入れ器官であるが、3本ある異常さに気付くと、3本の触角の形を単に読むだけでなく、その意味を探り出すために、「一枚起請文の源空花押」を読む場合のように、それを書いてみると、その概念図はカタカナの「ツ」の形になる。

その「ツ」の形は源空の愛弟子源智の花押の「サンズイヘン」を本来の「シ」でなく、「ツ」と表されるところから、師弟の師資相承の事実が読み取れたように、3本の形を画の通りになぞり書きすると、「ツ」の形になることは自明である。その背景に師弟の花押の読み取り方がある。そのように読めば、その下の黒色の頭の線も「ワカンムリ」の形になることは一目瞭然である。頭とともに顔の子供らしい愛らしさから、「ワカンムリ」の下に自然に「子」の顔があることから、左半分に「学」の字が意識に上る。

② 次に左半分の「学」の字から、右半分に目を移すと白い羽が目立つ。それを羽の形と色を組合せて、「学」に関連づけると、「習」の字が合成される。そして合成された「学」と「習」を組合せて「学習」の字が意識に成立する。それによって意識は自由で、創造的になり、創造力が高められる。その典型は「知足のつくばい」の読取り²⁰である。

③ 壺に満杯の蜜がカラー版ではっきり見える。「知足のつくばい」は単に「吾唯足るを知る」と読まずに、漢文の読み方を替えれば、「吾唯知を足すのみ」と知の継続的探求という一種の生涯学習になる。さらに中央の正方形の水穴を周りの4文字、「五、佳、止、矢」と組合せると、それぞれに正方形の形が時計周りに「イ、ウ、エ、オ」の発声の形になり、また初めの「吾」

の「五」と「口」の間が少し開いていることから、「五口」と読めば、その口の形は「ア」になり、そこに日本語の母音が表される。また「足」も「口」と「止」の間が少し開いているから「口止」で「ン」となり、「ア」と「ン」で「阿吽」になる。

このように知を足し続けると、「石庭」の謎が解けたように、「学習」と読んで自己満足に陥らずに、学習の持続可能な発展を齎らすと、長期間長持ちする蜜蜂の賞味期限は周知のように、ライフロングであり、持続可能性を象徴し、蜜蜂社会のエネルギー源となり、持続可能な社会的発展を支える力になることが分かる。

④ その発展力を生み出す蜜壺を携えて飛ぶ力は印象的である。そこで子供の力に注目して、「学」の字の「子」に代えて、「力」を入れると、新しく「勞」の字を読み出すことができる。その「勞」と子供ながらも一人前の働蜂の「働」と組合せて、さらに「労働」の字が読み取れる。「子」と「力」の互換には、子供の労働力がある。

⑤ 触角と頭を共通項にしたマスコットの全体像は学習と労働の一体化といえる。子供時代から生涯にわたる学・労一体化が始まることを画が示す。「生涯学習振興法（略称）」はわが国の生涯学習事業の支援を民間の教育産業にも委ねるため、所管を当時の文部・通産両大臣としていた。しかしこのマークではむしろ生涯学習の実践者の立場に立って、学と労の一体化を表現する。作者の意図からは法律の教育産業のイメージは薄い。それよりも学習者の創造力の育成に力点が置かれている。

(五) 情報交換と知の創造

⑥ 画において触角の「ツ」と頭の「ワカンムリ」を学・労の共通項とする。まず触角は一本が余分にあり、情報化社会へ対応する情報の受信と発信の器官と考えられる。その先端の赤い丸は

感性とハイセンスを感じ取らせ、高い感度を備える。

⑦ 他方に学・労に共通項の頭は学・労一体による新しい知的創造を予想させる。従来のいわゆる学校知の構造を脱皮し、理論知と実践知を一体化して知識の集約化が試みられ、現代社会が地球市民に求める創造力²¹を培う。

⑧ 顔の大部分を占める大きな目に象徴されるように広い視野の観察力を備える。その必要性は一連の研究成果が立証する。それらの角、頭、目が耳のない障害を補完する。

⑨ 羽の激しい運動は練習の効果を招き、「習」の語義ともなる。帰巢中に空に画く8の字踊りは仲間の蜜蜂への独特な情報伝達方法である。

(六) 生涯学習観の批判

作者の生涯学習観はマナビイに映像化されるが、従来の生涯学習観に拘り、その豊かなメッセージを含む独創的なマスコットマークが歪曲されることは否めない事実である。

たしかに学ぶ楽しさを表すマナビイのマークが生かされていることは、第8回全国生涯学習フェスティバルの表紙に示す。しかし画面の中心にその巨大な姿をクローズアップされているにも関わらず、肝心のスローガン「新しい風、生涯学習。」が削除される。

本来法令では文と画が、学と労のように一体になる。スローガンは読みやすい楷書の筆記体であり、文自体が風を表すように、マナビイの頭に沿って、少し蛇行して、頭の上を微風が流れるように画かれる。マナビイとスローガンは一体であり、切り離せない。

「生涯学習のマスコットマークの使用に関する取り扱い要領の別紙1）」には石ノ森のローマ字のサインの下に「デザイン：石ノ森章太郎」とし、その下に同じく活字体で「生涯学習のマスコット “マナビイ”」と説明する。たしかに

サインだけではデザインの作者が分かりにくい。しかし作者の名前と作者からの重要な呼び掛けが意図的に削除される。

その上「デザイン：石ノ森章太郎」の説明文も削除している。それによってマークの意味が歪められかねない。すなわち当局は公式のマークの使用許可に当たって、このような重要な文を削除することを認める。それは福岡の場合だけではない。

生涯学習は、新しい風、新風、新しいトレンドであり、新風を吹き込むのがマナビイのデザインである。生涯学習は従来の学習観を改革する新しいトレンドである。その風をマナビイのデザインから読み取ることを促すのが、この文章である。そこに学習改革への問題提起がある。それは新しい学習のトレンドを学習するよう促す。

しかしそのスローガンを削除することによって、マナビイのデザインから多くの重要なメッセージを読み取り難くする。学習の楽しさが新しいトレンドでない。このマークを自分なりにアイデンティティを生かして学ぶことを先の文は求めている。

このマークを学ぶにあたって作者名は重要である。しかし一般的にこのような公式のマークに作者名を入れることは異例である。そこに依頼者の行政側と作者との間に意見の食違いがあって、作者の責任と創作を明記したと考えられる。

このマークに作者の旺盛な創造力、鋭い時代感覚、巨大な制作工房の組織力、積極的な社会参画意欲、特に作者のアイデンティティが生きる強烈な個性などが読み取れる。そのことを表すサインを説明抜きにすることは問題である。

さらにこの生涯学習のマスコットに“マナビイ”とカタカナ表記がなされているにもかかわらず、「まなびピア福岡」とひらがな表記と「まなび」に特化することは、使用上取り扱いに重

大な問題が生じる。

マスコットマークのマナビイはマークが蜜蜂であることから、マナ・ビイ、すなわち愛弟子、愛娘の「マナ（愛）」と「ビイ（bee）」の合成語を表し、むしろ「学び」はその背後に隠されている。行政当局はマナビイの意味を一方的に短絡して、不用意に規定するが、単に「まなび」のパロディではない。それはマナビイ本来の意味を歪曲する。

幅広い読者層に支えられる作者は時代の旗手の一人であり、新しい風の生涯学習から従来の学習観に挑戦する。それが国民的漫画家の作者の面目である。現代の学習に作者の理解する生涯学習の観点から新風を吹き込もうとするデザインに改革意欲が読み取れる。

近刊の角川書店創業70周年記念出版を飾る500タイトルの作品は、何れも創造力の豊かさには、定評がある。石ノ森のこのマークも例外でなく、むしろ代表的作品の一つといえる。ただ作品は画だけでなく、それとスローガンとマナビイの名称の三位一体が重要である。しかしその画だけが用いられる。三者の関係をどう読み取るかが、マナビイの学習課題の一つであり、それが創造力の育成²²に繋がる。

作者の創造力は膨大な作品の分析を必要とするが、典型的なこのマナビイのマークの分析が作者の個性的な、しかし同時に普遍的な創造力への接近の一つになる。そのために従来の学習観からの脱皮が求められる。この作品に特に作者のサインが付けられるのはその創造力の所産であるからである。それは「新しい風」として学習の既成概念の枠組みを打破する。そして同時に今日なお曖昧な生涯学習概念を見直させる。

ここに提示するマナビイの読取りの過程は、研究歴が一つのアイデンティティとして反映する一例にすぎない。そこに作者との対話がアイデンティティの交流の形で成立する。ここに導

かれた生涯学習観が正鵠を射ているかは研究方法の確実性による。それは先ずマークの読取りから始まる。石ノ森は教育学者でないだけに従来の教育学の固定観念の枠組みに捉われず、自らの創作体験に基づく新しい発想を提言するのがマナビイである。

⑩ 画がしめすように生涯よりも学習・労働に力点があり、成人学習ハンブルグ宣言の結びにあるように、学習・労働は持続可能な発展の源、喜び、権利、そして地球市民としての責任分担である。これが端的に表されているのが、マナビイのデザインである。

マナビイの小さな鼻は微笑を含んだ口元とともに楽しげで愛らしい。学ぶことと働くことの楽しさと喜びを表し、自己実現と他者奉仕の生きざまが明るく画かれている。マナビイのマスコットマークは頭と顔が大きく画かれ、蜜蜂の子どものイメージを与える。

平成時代の情報化の進展とともに、従来の生涯学習の枠組みが飛躍的に発展したが、それを先取りするデザインが「学習」と「労働」との結合である。それは当時の生涯学習振興法から外れたデザインでなく、マスコットマークの創案に当局の情報をデザインに巧妙に折り込んだことは十分に推測できる。

マナビイは、労働者を含む学習者の構図であるから、それはあくまで生涯学習参加者に対するPR資料である。しかし学校知を中心にする日本の生涯学習の性格づけの一つとして労働との結合は重要である。それは職業教育にも関連づけられ、近年いわゆるニートの若者が増える中で、学習と労働との結合の在り方は、今日特に見直しが求められている。

したがってマナビイは学習と労働との連携を示唆することによって、ニート問題の解決の鍵を秘めている。子供の段階から労働との関わりを学習を通して意識させることによって学びがい、働きがい、そして生きがいを自覚させな

ればならない。その総合のシンボルマークがマナビイである。その潜在意識化によって学習の国際的性格づけにつながる。

⑪ “マナビイ”のカタカナ表記と引用符は、学びと蜜蜂の合成語であるよりも、カタカナ表記は専ら外来語に用いられるから、ビイが中心で、マナがビイにつく。それに一体化して、マナビイの形と色を操作して、学習・労働がつく。当局の構想は生涯学習振興法の趣旨から学習産業への民間活力の導入であるが、マナビイの引用符が示唆するように、石ノ森の発想は、蜜蜂の子供を中心とした労と学の結合であり、それが石ノ森の創作活動を生涯にわたって貫く。

昆虫には世界的に多くの種があり、新種の発見が続くが、蜜蜂には5種類しか確認されず、その新種は長く未発見のままである。それが五輪マークを連想させ、人種間の平和な繋がりを示唆し、人類の学習の普遍的シンボルマークとして蜜蜂の擬人化は意味がある。また制作当時「蜜蜂ハッチ」が人気アニメであり、愛らしいキャラクターは日本で親しまれ、やがてアニメ映画として海外にも放映されるようになったことは周知である。なおドイツの童話の「蜜蜂マーヤの冒険」もよく知られている。

⑫ 法令の「新しい風、生涯学習。」はマナビイと分離されるが、スローガンの意味ばかりでなく、マナビイに沿って流れる新しい風のデザインにも注目しなければならない。この独創的なスローガンのデザインは、まだ一向に定義できないは「生涯学習」の本質を触感的に表現しているといえる。すなわち生涯学習の本質は新風、トレンドであり、実体的に捉えにくく、その概念化に成功していない。

⑬ 新しい風とは要するに、時代の要請のトレンドであり、それに従い、のるのである。それを捉えるには、目には見えない働きを感じるハイセンス、鋭い洞察力の必要な時代感覚が、触角の働きをする。その学習の新風を列挙すれば、

国際性、情報力、地域性、広域性、実用性、日常性、組織力、集団力、社会性、持続力、感受力、想像力、創造力などが“マナビイ”から導きだされるイメージである。

⑭ 生涯学習はしたがって新しい風のようにマナビイの労働と学習を助ける。成果の蜂蜜から学習と労働の既成概念を見直させる。その見直しが新しい発想を生み、学習・労働一体の持続可能な発展を導く。その原動力が生涯学習であり、見直すための視点、視野、または枠組みの働きをする新しい概念である。

(七) 生涯学習観の改革

⑮ 生涯学習のマスコットマークはマナ（愛）ビイ（蜜蜂）と読めるように、身近で親しみやすいイメージであるが、その愛称の裏に生涯学習の視野と枠組みからの学習改革の課題提起が隠される。時代の要請である21世紀の地方分権時代の到来に向けて学習と労働の密接な関連が改革力を秘める。

マナビイのデザインを精査すれば、当時から一貫する日本の生涯学習観があきらかになるはずである。それを解明するために、京都龍安寺の石庭と知足のつくばい、円光寺の「十牛之庭」、第5回国際成人教育ハンプルグ会議のマークなどの解読方法が有効である。

⑯ マナビイの下に書かれた「章太郎」の「章」のサインは角川書店創業記念出版『石ノ森章太郎漫画大全集』に纏められる画伯の生涯にわたる創造的学習・労働を反映する。すなわちマナビイはマスコットマークの下部に「SHO」と書かれているように、石ノ森章太郎画伯のデザインである。

画伯がこのマナビイを創案するに際しては、当局から日本の生涯学習観について多くの情報を得て、それらの生涯学習情報を「マナビイ」のマスコットマークの中にインプットしたはず

である。多様な関連情報が一つのイメージになり、概念図に仕上げられたのが「マナビイ」である。

しかし画伯の異例のサインが示すように、関係法が強調する教育産業育成よりも、人間中心主義²³の労学一体化に画伯の独自性がある。それは今日のいわゆるニート問題を見据えている。

(八) 福岡の合言葉の普遍性と地域性

⑪ 96年第8回全国生涯学習フェスティバル福岡²⁴のキャッチフレーズの「未知のわたしと出会う道」は生涯学習の意味の一つであるが、このスローガンは一見福岡県の地域性を読み取ることとはできない。それは全国どこにでも通用する普遍的なフレーズといえる。

そこでそのフレーズを地域の視点から福岡の地域性を意識して読み直すと、「未知のわたし」とは未知の「私」だけでなく、「わたし」は「渡し」とも読むことができる。古来この地域は大陸との海上交通の拠点として懸け橋の役割を果たす「渡し」場であった。

近年忘れられた「未知の渡しと出会う道」がまだ福岡には残されているはずである。その開催を契機としてそのような国際的な福岡の地域性をスローガンに打ち出すことによって生涯学習の地域性と国際性をアピールするのが、もうひとつの意味であるといえる。

もちろんその第一義は「未知の私と出会う道」であり、学習は機能的に未知の私と出会うことであり、福岡は歴史文化都市として恵まれた学習資源の地であり、学習機会を豊かに生涯にわたって提供する。

ポスターに描かれる道は縦と横に繋がり、生涯学習社会の縦と横の統合を表す。その統合は生涯学習への参画によって成立する。そこに男女共同参画が成立するとともに、老若共同参画、

異文化共同参画、多言語共同参画、健障共同参画、貧富共同参画などもそこに強く期待されるはずである。女の子と男の子の共同作業の風景は多様性尊重の参画社会の原点を表す。それは要するに生涯人権学習社会である。

そのような多文化共同参画社会において未知のわたしと出会う道が完成し、その道は多種多様な生涯学習を方向付ける。それは身近な内なる国際化に始まって、大陸文化との懸け橋に出会い、さらに歴史的にシルクロードのルートへの参加である。

そして「まナビピア福岡」はこのように「未知の渡しと出会う道」を地域特性とし、歴史的な国際化を独自に発展させる生涯学習社会であるとともに、その外的発展とともに、また内的発展をめざして「未知の私と出会う道」になるもうひとつの地域性を示す。

「未知の私と出会う道」が外的発展の「未知の渡しと出会う道」と一つになって、どのように生涯学習を通じて地域性に富む学びの道が成立するのか。そのヒントになるのが「未知のわたしと出会う道」の「わたし」が掛詞になって、「私」と「渡し」が結びつく。

もちろん多様な共同参画を可能にするのは生涯学習によってである。そのために国際化を標榜する福岡の多文化学習社会は、ユネスコの国際成人教育会議の二つの宣言、85年の学ぶ権利、いわゆる学習権と97年の成人学習ハンプルグ宣言を重視しなければならない。

「まナビピア福岡 96」とあるように97年第5回国際成人教育ハンプルグ会議の前年であるが、会議の案内状²⁵によれば96年にその地域会議が開催され、95年に世界の教育専門家のワーキング・グループによって第5回会議の主題が10テーマに予め設定された。

拙稿²⁶が明らかにしたのは、85年パリ会議の宣言について専らその前半に頻出する「学ぶ権利 (the right to learn)」に関心が偏り、学ぶ

権利が人類の生き残りに必要不可欠な道具であり、その必要性と不可欠性の論拠が示されて、基本的人権とされるが、その公的承認のために、国民的教育運動、科学的教育研究が前提となり、その教育運動はまず当時のウーマン・リブ運動の世界的潮流に乗って女性団体の参画が要請されるのが、宣言の後半²⁷である。

宣言の前半に1例、後半に3例出る「男性と女性」(men and women)の慣用句に代わって、敢えてすべて「女性と男性」(women and men)の用語によって、公正な男女共同参画社会の形成が課題提起されているにもかかわらず、成人教育においてもそれが具体的に実を結ばず、成人学習ハンブルグ宣言において改めて第1条に男女共同参画社会の形成が提起された。

そして前半に学ぶ権利が定義され、学びの機能体系が学習の基礎と基本について権利として主張されるべき学習機能の中核部分を分かりやすく体系的に表し、従来の学習論を画期的に転換させたにもかかわらず、それ以降の論述はすべて「学ぶ権利」と表現する。

それが宣言の理解に重大な欠陥を生じさせ、特に「基礎的・基本的な学習」というように基礎と基本が中グロで結ばれるだけで、学習の何について基礎と基本とするのか、その関連をどのようにして、学習を新しく捉え直すのか、不明のままに放置される。これは学習指導要領の総則において端的に表れている。このことは今日の学習論を不透明なものにする元凶といえる。それに対して学ぶ権利の定義は自動詞の前段の基礎と他動詞の後段の基本に分けて、両者の機能連関を明確にしているが、この点が正当に評価されない。

ハンブルグ宣言の第2条にアイデンティティの形成と生活の意味付けが示されるが、その点はバリ宣言の学ぶ権利を精読すれば、明らかである。「未知のわたしと出会う道」とはそのようなアイデンティティを学習によって自己形成

することである。

そのアイデンティティは読み書きの段階においてすでに形成されることは識字学級の実践において実証される。読み・書き (to read and write)、問い・分析 (to question and analyse)、想像・創造 (to imagine and create) が基礎的学習を形成し、それらが統合されることによってアイデンティティが働き、形成、発展する学習機能の土台が成立する。

その基礎的学習機能の上に「自分自身の世界を読み取りそしてその歴史を書く」(to read one's own world and write history) 基本的学習機能が成立する。自分自身の世界を読むとは世界観の形成である。そしてその歴史を書くとは歴史観の形成である。

世界観と歴史観の形成が第1に基本的学習機能として、学習機能のコアに位置付けられる。人間は真の自己を求めて学ぶが、学びによって未知の私と出合えば、アイデンティティを確かにする。したがって世界観と歴史観の形成が成人学習機能のコアになる。

その底流にある学習機能論は、徒にイデオロギー的対立のなかに埋没させるべきではない。そのために教育運動とそれに対立しがちな教育行政を媒介する役割が、教育研究に強く求められる。その中心的拠点がハンブルグにあるユネスコの国際教育研究所である。

学習機能の読み書きにも、また問い・分析などにも、接続詞「と」にアイデンティティが働き、育つのである。この「と」が「未知の私」であり、学習機能においてその未知の私に出会う。その発展が真の自己と呼べる。

学習とはアイデンティティとの出会いであり、自己形成である。真の自己の自覚とは典型的に禅修業の学習にある。また学習によるアイデンティティの形成は、客観的存在の自己を主体的存在に変化させ、そのような自己が生活を意味付ける。

むしろパリ会議の宣言における「学習権」の定義は性急な教育運動が中心になるために権利要求が先走り、かえって未成熟といわざるをえない。それに対して成人学習ハンブルグ宣言のそれは生涯にわたって教育を受ける権利と学ぶ権利とが統合され、学ぶ権利の理念が示されて、成熟の跡が伺える。それは学習権の後退を意味せず、逆に一步前進になる。それは今後学ぶ権利についての研究・運動・行政を発展させる契機になる。

その転機は福岡の「未知の私と出会う道」と「未知のわたしと出会う道」の統合した「未知のわたしと出会う道」の生涯学習において地域的に実践させる呼び掛けになる。そこに地域生涯学習の本質が読み取れる。

⑮ 右下隅に女の子と男の子が力を合わせて最後のピースを嵌め込み、「未知のわたしと出会う道」を完成させるジグソーパズルの意味は、その道の完成を次世代のこどもに託して、福岡の地域生涯学習の持続的発展可能性を展望し、同時に男女共同参画社会の学習・労働をマスコットマークとともにする構図は、多様性尊重の原則を表す。

マナビイを組み込んだ構図はキャッチフレーズの「未知のわたしと出会う道」の学びの大道をジグソーパズルにデザインされた大きな道路の敷石を表す。その最後の敷石がジグソーパズルの完成図のように二人の子供の手で嵌め込まれる。横書きの「まなびピア」の5文字が一筆書き風に横につながっているように、学習の理想郷である生涯学習社会がジグソーパズルのようにそれが画く道が縦横につながる。

ではそこに日本の生涯学習観がどのように読み取られるのであろうか。すなわち「マナビイ」から何を、どのように学ぶことができるのか。「マナビイ」を生涯学習の学習課題としてそこから生涯学習の共通認識を導きだしてみよう。

また「まなびピア」の合い言葉から日本語の

学びと外来語のユートピアの「ピア」がひとつづきに書かれ、国際的連帯の一端が表されていることも重要である。その連続線に対して、「び」の字が途中で切れているが、これも「まなび」と「ピア」との一体性を強調するために巧みな工夫であるといえる。それに続く「福岡 96」は繋がっていないだけに「まなびピア」の連続性は強い印象を与える。

しかし「マナビイ」の場合は逆に一見して上空を跳んでいるように見えながら、図柄はすべてジグソーパズルの一部分を構成し、「未知のわたしと出会う道」と一体化している点は注目すべきことである。すなわち見方を変えれば、マナビイは道の上に画かれ、道の一部分となりながらその構図は飛んでいる。

右下隅の最後のピースを嵌め込もうとする女の子と男の子だけが写真になり、笑顔で上を見上げてマナビイの微笑と同じく、敷石を置く最後の道づくりの仕事を完成させようとしている。その道は大きく「未知のわたしと出会う道」である。

学びがジグソーパズルに組み入れられているために、そのイメージが定着しやすい。それを読み取るだけでなく、書くことも作業に入っている。その作業はひとつの働きであり、想像する学習機能を働かせ、to imagineの権利と結びつく。書くことによって多くの問いが生まれ、さらに想像が豊かになり、to createへの道が拓かれる。

学ぶ権利の定義にある学習諸機能は学びにおいて統合されるが、それが権利として承認されるために教育運動と教育研究が必要であり、教育運動についてはパリ会議の宣言の後半に示される女性団体の参画が必要であり、それが基本的人権と認められるために、学習権が人類の生き残りのために必要不可欠な道具を立証しなければならない。

しかしながら学びは権利として包括的に主張される機能だけでない。子供の学習を観察すれば

ば、to read and write の前段階として、to hear and speak の段階があり、その前にさらに初期において to see and act の段階がある。それらは学習の基盤的機能である。

この見方は男・女、老・若、健・障、貧・富、異文化、少数者等についてもそれぞれの多様性を相互に尊重することを通じ、それぞれの主体性を尊重し、助け合い、ともに生きる人権学習がそこに営まれる。多文化学習社会では単なる平等 (equality) よりも、公正 (equity) が重要であることを成人学習ハンブルグ宣言の第2条に明文化されている。

子供たちは働く喜びを通して労働の煩わしさと喜びを知り、学ぶことによって労働の喜びが増すことを理解できる。その時子供たちは自分の生きざまをマナビイに置き換える。マナビイを見上げる2人の子供は、自立的なマナビイの生きざまを通して自分たちの学びを見直すことになる。マナビイのように自由に飛び回って働くためにはどのような学習が必要であるのかを自覚し、生きる喜び、生き残る道具、必要不可欠な権利、社会人としての責任分担としてのマナビイのような学習を取り戻すことが自分たちの学習に求められていることを理解する。

そのように理解した子供たちは、働蜂の子供であるマナビイがすでに一人前の仕事を任されているように、大人から認められる学習、大人の学習の一環としての学習、そして生涯学習に自ら参加するようになる。マナビイが立派な働蜂であるように、2人も立派な学習者として生涯学習の道づくりに参加する。

マナビイが郷土を護るように子供たちも郷土の平和を護るために、国際社会において何をすべきかを学ばなければならない。平和学習は真剣に命懸けで行なわなければならないことを子供たちは学ばなければならない。

子供たちは世界の平和を護るために、献身的に国際理解学習、異文化理解学習、国際交流学

習、そして国際協力学習に取り組まなければならないとともに、そのためにいまこの自分たちは何をどのように学ぶべきかを知り、そのような学習に取り組まなければならない。マナビイにはこのような子供たちへのメッセージを同時に含むのである。

先にハンディキャップをもつ人々との共同参画社会を創る人権学習とともに、このような平和学習への取り組みも必要・不可欠である。パリ会議の宣言において平和に生きる学習を必要不可欠な権利の一つに数える。成人学習ハンブルグ宣言においても同様である。

(結び) 残された課題

以上に見たように成人学習ハンブルグ宣言の結びは学習が喜びであり、人類の生き残りのための道具であり、権利であり、そして地球市民としての責任分担である。それが端的に表されているのが、マナビイのデザインである。

マナビイのマスコットマークは多様な生涯学習のイメージを包含しながら、石ノ森の天才的な手法によって分かりやすく、簡潔に、しかも明るく親しみやすくそして印象深いマークに統合されている。そこに他にも重要な生涯学習の意味を読み取れるであろう。

このキャラクターは読む人の想像力を導き、創造力を高める働きを具える。そこに生涯にわたって統合された学習のイメージが多様なアプローチを俟つ。石ノ森自身も生涯にわたって創造的な作品を世に残した。それは創造力の育成に生かされる。

それは生涯学習事業のPRのためのアクセサリーにはしてはならない、京都龍安寺の知足につくばいや洛北円光寺の「十牛之庭」のように、多様な読取りを促す。それによって養われる創造力がつくばいと十石の庭を踏み台として永遠の謎とされる石庭を解明させるように、マナビ

イは生涯にわたって創造力豊かな石ノ森が残した創造的作品の一つである

これを踏み台にしてさらに創造力を育成する生涯学習の新しい定義が、残された課題²⁸である。その解決の一つに拙稿は「マナビイ」の生涯学習観を踏まえた「生涯人権学習」を2009年に開催予定のユネスコの第6回国際成人教育会議に提言したい。

- 01 「生涯学習の振興のための施策の推進体制等の整備に関する法律」
- 02 2005年は第17回になる。
- 03 76年「成人教育の発展に関するナイロビ勧告」の成人教育の定義に生涯学習が折り込まれている。他に97年「成人学習ハンブルグ宣言」と2003年「同バンコク中間総括会議報告書」などに間接的に定義付けが試みられる。
- 04 「生涯学習のマスコットマークの使用に関する取り扱い要領」の別紙1)に、「生涯学習のマスコット“マナビイ”」が作画される。図1参照。
- 05 「“マナビイ”」は片仮名表記であり、「まなび」と「ビイ」、すなわち「学び」と「蜂」の合成語とするよりは、「マナ」と「ビイ」、愛弟子の「愛」と「蜂」である。
- 06 2004年度「生涯学習のまちづくりに見るマンガ文化」
- 07 なぜ引用符つきのカタカナ表記であるかなどについて、岩佐は触れていない。
- 08 そのマークは開催年の「97」と読まれるだけでなく、その形と色の分析から手筋の模様と学習の多様性尊重の原則が読み取られ、さらにそれから共同参画社会の在り方を示唆する『教育学部論集』第11号、2000年
- 09 科学的方法の対象観察の意識形成に着眼する『日本仏教教育学研究』第6号、98年
- 10 越溪禅師作「達磨図頌」を裏向きにして、図（画）と頌（文）を関係づけて読む『教育学部論集』第13号、2002年
- 11 法然と愛弟子の花押の関係から師資相承を読み取った『日本仏教教育学研究』第12号、2004年
- 12 嘯口元から「佛（ブ）」の発声、すなわち「南無阿弥陀佛」を称える姿を導きだす『教育学部論集』第16号、2005年
- 13 草稿本の紙背に突き抜ける強い筆勢との比較、「七箇条起請文」の源空花押との比較によって、奥書を真筆とした『教育学部論集』第8号、97年
- 14 蓮如の異例に多くの修正箇所について、その前と後を比べる『教育学部論集』第9号、98年
- 15 従来独創性に欠けると評価される蓮如の思想を見直すために、「山中の御文」における「自信教人信」の「自心教人信」への訂正箇所を観察して、独創性を見いだす『教育学部論集』第10号、99年
- 16 奥書によれば元久元（1204）年書写。『教行信証』後序の親鸞書写本の底本であることを別稿する。
- 17 その原本はなく、現在最古の書写本である。
- 18 注01の手筋の解析法をハンブルグ宣言の主文に適用する『教育学部学会紀要』第4号、2005年
- 19 法令では色指定
- 20 「京都龍安寺の生涯教育論」、『日本仏教教育学研究』第6号、98年
- 21 生涯学習と生涯労働との連携モデルは、著者に委託された「81年京北町振興計画」の「地域複合」に具体化された。「70年代の町づくりと地域社会教育」、『関西教育学会紀要』第5号、96頁
- 22 成人学習ハンブルグ宣言も当初地球市民の創造力の育成を課題としながら、バリ会議の宣言の残課題、男女共同参画社会を中心に置き、創造力への関わりが十分でない。
- 23 84年に教育テレビのインタビューに応じて、石ノ森は「やはり最後には人間を描きたい。またそれを描いてきたつもりです。これから年齢に合わせて、年齢の応じた人間を描いていきたい。」と語った。NHKアーカイブスNo. 058
- 24 96年第8回全国生涯学習フェスティバルを事例とするのは、この秋に福岡の太宰府天満宮の隣に九州国立博物館が開館し、博多湾が日宋貿易と南蛮貿易の交易基地であり、すでに4世紀後半から「海神の棲む」沖ノ島は「海の正倉院」と呼ばれるように、古来大陸との交流が濃密であった土地柄であったからである。
- 25 A4判8頁の英文の案内状の表紙に、第5回会議のロゴマークと会議の主題「成人学習：21世紀への鍵」が明示され、会議の趣旨、目的、要領、日程などが各地域の学習課題を示す写真入りで分かりやすく、詳しく案内される。ただここでは21世紀の成人学習の重要課題の一つに「地球市民の創造力の育成」が掲げられながら、成人学習ハンブルグ宣言では前回バリ会議からの引継ぎ課題の「男女共同参画社会の実現」が力説され、「創造力の育成」が薄れているのは、今後の課題である。
- 26 「国際成人教育会議における生涯教育概念の転換

点 一パリ会議の最終報告と宣言を中心に―]、

『教育学部学会紀要 第3号』、2004年

27 学ぶ権利の宣言の後半に「学ぶ権利」の用語はでないことの重大な意味が理解されなかったことは残念である。

28 2009年第6回国際成人教育バンコク会議に向けて、生涯教育・学習の学術的概念規定を試みて、その課題を解決する論文は、来る2008年『佛教大学教育学部学会紀要』第7号に投稿する予定である。